

# 「人生」を語り始める清水幾太郎

——社会学と自伝が会うとき——

東京大学大学院 品治佑吉

## 1 目的

社会学者の清水幾太郎（1907-88）は、太平洋戦争後の1949年10月、42歳というキャリアの盛期に自身の半生を振り返る自伝を発表している（清水 1949）。清水はその後にも繰り返し自伝的なスタイルの著作を刊行するとともに、また主婦や学生などにむけて人生案内と呼ぶべき著述を多数発表している。かくして若き清水が自身や読者の「人生」を語り始めたことは、同時代から後進の日高六郎などによって若干の驚きをもって受け止められていた（日高 1956）。

それでは、（1）清水が自身や読者の人生を語り始める動機はどこにあったのか。（2）またそれはなぜ終戦後のこの時期においてだったのか。これらの問題は、清水のメディアでの活動や自伝執筆に関する既存の研究（竹内 2012; 大久保 1997）では十分に検討されていない。

## 2 方法

本報告は上記の問いに、戦後までに清水自身が元来抱いていた主題と、清水がそうした主題を自伝という媒体を通じて発表した経緯の2点に着目して回答する。

具体的には、（1）まず戦前以降の清水幾太郎の著作の読解を通じて、そこでの問題意識が彼自身の自伝や人生案内の執筆の動機や内容に影響を与えている可能性を検討する。（2）また、戦後に清水の自伝的著作が発表された経緯を、著作の内容、および当時の清水の交際圏に着目して明らかにする。特に、当時編集者として戦争経験にまつわる多くの企画を立ち上げ、「わだつみの会」や思想の科学研究会にも参加したことで知られる安田武（1922-86）に着目し、彼の関心や清水（1949）をはじめとする彼が企画を立ち上げた著作に関する検討を行う。

## 3 結果

以上を通じて、（1）清水がかねてから社会学それ自体人びとの「人生から生まれ、人生へ帰っていく」（清水 1959）ものであるという信念を有しており、自伝的なスタイルはそうした清水の信念に適合的な媒体であったこと、（2）また、敗戦後に清水が実際に自伝や人生案内を執筆する機会を提供した事情として、戦争の記憶のなまなましかった出版人の間で、書き手が過去の経験をプライベートに開示する回想や自伝に対し、学術論文や時事評論とは異なる知識人との共感の回路として期待が寄せられていたという事情があったことが明らかになった。

## 4 結論

戦後における清水幾太郎とその活動を社会学者として統一的に理解するには、実は彼における人生という主題とそれを語る媒体の獲得こそが重要な意義を持っている。また戦後の清水の人生をめぐる語りを検討することは、その後の日本の社会学が出版メディアの、ひいては社会の中でパブリックイメージを形成していく過程を明らかにする上で重要な意義を持ちうる。

## 文献

日高六郎, 1956, 「まえがきにかえて」清水幾太郎『私の読書と人生』河出書房, 3-6.

大久保孝治, 1997, 「自伝の変容——清水幾太郎の3冊の自伝をめぐる」『社会学年誌』38: 103-20.

清水幾太郎, 1949, 『私の読書と人生』要書房.

———, 1959, 『社会学入門』光文社.

竹内洋, 2012, 『メディアと知識人——清水幾太郎の覇権と忘却』中央公論新社.